科学者の倫理観

理学研究科長　**横　張　文　男**

最近、科学者の世界でも嘆かわしい事件が多発している。2000年に藤村新一氏による旧石器捏造事件が発覚したときは、掘り出された物の自然科学的年代測定が一般的ではなかった考古学界の特異な事件と思っていた。しかし、最近、生命科学を中心に自然科学の領域でも論文捏造・証拠捏造事件が多発し、科学者の倫理観はどうなってしまったのかと思わざるを得ない。

癌などの治療薬開発に結び付くと期待される「RNA 干渉」分野で第一線の研究者であった東京大学工学系研究科のある教授らが、1998年から2004年にかけて英科学誌ネイチャーなどに発表した12編の論文について、日本 RNA 学会が「実験の再現性に疑いがある」として東京大学に調査を求めた。これを受けて東京大学工学系研究科調査委員会が調査した結果、実験結果の再現性を確認できなかったと報告し、事実上捏造論文であると認定している。また、韓国随一の生命科学の研究者であると目されていたソウル大学獣医学部の黄禹錫教授らが「ヒトクローン胚から ES 細胞樹立に成功した」とする論文を米科学誌サイエンスに2004年に発表していたが、この論文や関連する幾つかの論文が捏造され、実験に用いたヒト卵の入手法にも倫理的問題があったことが判明した。この事件は韓国だけではなく米国の共同研究者も巻き込んだ大きな騒ぎになっていた。このほかにも、大阪大学大学院医学研究科での論文捏造事件も記憶に新しい。

このような事件が多発する背景にはさまざまな要因があると思うが、科学者の倫理観の弱さも一つの原因になっていると思う。科学者の倫理観が最近になって特別に低下したとは思えない。もともとあいまいな倫理観しか持ち合わせていなかったために、新自由主義的な科学政策の下で栄誉、地位、助成金の獲得などの誘惑に抵抗できずに一線を越えてしまったのではないか。東京大学教授もソウル大学教授も巨大プロジェクトを率いていた“優れた”科学者であり、生命科学の成果をもとに産業育成を目指す国家プロジェクトの中核的な研究者でもあった。それだけに周囲からの期待も大きいし、大きな成果をあげることが新たな巨大プロジェクトを獲得する条件になるから、本人自身も画期的な研究成果を上げることに至上命令のようなものを感じていたのではないかと思う。それにも関わらず期待するような成果が得られないために、論文捏造という挙に出たのではないか。これほどの大型プロジェクトでなくとも科学研究費補助金など競争的研究資金を導入するには、研究計画だけでなく研究実績も評価されるから、科学者は誰でも似たような状況に置かれている。我々もこれらの事件を他山の石として自らの科学倫理観を確立することが必要であると思う。

最近、教育研究資金不足のために教員自らの研究はおろか学生の研究指導も十分にできなくなっている大学もあると聞く。幸い本学では概してそのような状況ではないが、科学的倫理観を確立するためには良心的で十分な学生指導ができるだけの教育研究経費を大学が用意することも大事だと思う。